

談話構造分析の計量的視点による一試案

—首都圏大学生話者の場面別談話を対象として—

齋藤孝滋

キーワード 談話構造 句 拍 公私 類型化

1. 談話構造研究の流れ

話者が自身の経験したテーマについて独話した談話の構造を対象とした研究としては、Labov and Waletzky (1967)、Labov (1972)、久木田 (1992a)、沖裕子 (1993a)、田中 (2004b) 等があげられる。

Labov 等は、個人的経験物語の分析をとおして、対象とした物語が「要旨」「設定」「出来事 / 詳説」「評価」「結果」「結語」という6つの要素を見出し、類型化を試みている。

久木田恵 (1990) は、「主観直情型 (東京型)」と「客観説明累加型 (関西型)」の類型を設定している。久木田はさらに久木田恵 (1992a,b) で新たな展開をみせている。

沖裕子 (1993a) は、談話構造全体を談話型としてとらえ、ロシアフォルマリズムの民話分析の方法を導入しモチーフ素の観点から、類型化を試みている。

田中香織 (2004b) は、Labov と久木田の方法の両要素を盛り込み新たな視点を加えた独自の方法を展開している。

また、久木田の視点にたった研究としては、畑中宏美 (1994)、野崎希世江 (1996)、園部みゆき (1997)、須崎由嘉 (1999) 等がある。

琴鐘愛 (2006) は、談話標識の出現傾向から、話者の聞き手への情報共有の働きかけから、方言的類型を見出している。

談話内容構造の量的研究としては、久木田の視点に立ち、久木田の類型法の重要な要素である主観的要素を、「文」レベルで測定し、主観性の含まれる「文」の割合を根拠に類型化を試みたものとして、齋藤孝滋・奈良夕里枝・晋萍・伊藤孝浩・フェリス女学院大学地域言語調査会 (2000)、荒則子 (2003)、加藤彬子 (2004)、金子仁実 (2004)、佐藤和奈 (2004)、島津朱美 (2004)、芹沢美樹 (2004)、中下満裕 (2004)、中島暢子 (2004)、西彩乃 (2004)、西ヶ谷知里 (2004)、古澤友美 (2004)、丸山法子 (2004)、三堀美沙 (2004)、山田麻未 (2004)、田中香織 (2004c) がある。

さらに、談話を、物理的ポーズ (基準時間 0.3 秒) により「句」に分割し、主観性の含まれる「句」の割合を根拠に類型化を試みたものとして、齋藤孝滋編 (2005) に収められた佐藤有香 (2005)、川原サオリ (2005)、川澄香奈恵 (2005)、鈴木あずさ (2005) 等がある。これらの論考には、各句について「拍数」、「時間」・「速度」・「強さ (音圧) と強さの幅」等のパラ言語的要素まで含めた音響音声学的分析による測定値が示され、「句」の種類との関連性が論じられている。

齋藤孝滋編 (2008 刊行予定) では、各話者について同一内容の場面別 (くつろぎ場面对テレビ場面) 談話を収録し、資料化と分析を行っている。資料化と分析法の詳細は齋藤

孝滋（2008）に譲るが、研究者の視点によって変動する「句」の内容による分類は行わず、齋藤孝滋編（2005）の「拍数」、「時間」・「速度」・「強さ」に加え、「高さ（ピッチ）と高さの幅」の音響音声学的測定値も提示し、各要素についての場面別の統計的検定を実施し、数種類の類型を見出している。

2. 目的と方法

本研究の長期的目的は、パラ言語的要素まで含めた総合的な談話構造メカニズムの解明であるが、談話構造自体についても、先に紹介した注目すべき研究はみられるものの、当該研究分野として初期的な発展途上段階であるといえる。

本稿の目的は、同一個人内の場面別談話資料を用いて、談話構造について、談話要素の抽出と、類型化の計量的視点による一試案を提案することにある。

3. 調査と文字化資料について

ここ数年間、齋藤担当の『ことばのフィールドワーク』の授業で、継続的に、フェリス生の談話について、音響分析器も援用しながら、談話文字化資料を作成し、談話構造の解明に取り組んでいる。

ここで紹介する談話文字化資料は、齋藤孝滋編（2008）中に収められた報告、フェリス生である齋藤淳子氏執筆「1. 神奈川話者の談話」における文字化資料の一部を引用（部分的に齋藤修正）したものである。なお、本稿における分析・考察は、齋藤独自のものである。

3・1. 調査について

3・1・1. 話者プロフィール

1986年生。0～21才：神奈川県横浜市。父：山形県新庄市、母：神奈川県横浜市

3・1・2. 調査方法

調査は、齋藤担当のコミュニケーション学科専門科目『ことばのフィールド・ワーク』の中で、二人一組になり、「発話者が、聞き手に対して、好きな話題について、独話する（その際、聞き手は、発話者に合わせて自然なかたちで頷いてよいが、声を出してはならない）」というかたちで行った。

場面は、ほとんど無限に設定できるため、ここでは、言語規則選択の切り替えが最も顕著に現れると考えられる次の二つの場面を設定することとした。

くつろぎ場面：「同年代・同性の親しい友人と、自分の部屋でくつろいで話をする場面」

TV場面：「全国放送のTVに出演して話をする場面」

収録場所：フェリス女学院大学緑園キャンパス図書館マルチメディアルーム

収録年月日：くつろぎ場面：2006年10月12日15：30～16：20の時間内

TV場面：2006年10月16日15：30～16：20の時間内

収録方法：全員ヘッドフォン付きマイク（すまいるマルチメディアヘッドセット

HP-2K：マイクの距離・方向が一定に保たれるタイプのもの)により、PCの音声分析ソフト『音声工房 SP4WINpro』に直接録音入力する。

3・2. 文字化資料の作成

文字化の方法にはいろいろと考えられるが、ここでは、「音韻論的カタカナ表記を」採用した。文字化に際しては、まず、発話音声のポーズ（休止）を測定して、発話単位（ここでは「句」と称する）を認定する。ここでは、0.3秒以上の無音区間をポーズと認定することとし、ポーズの長さについて、 $0.3 \text{ 秒} \leq \text{pose} < 0.6 \text{ 秒} : \#$ 、 $0.6 \leq \text{pose} < 0.9 \text{ 秒} : \#\#$ 、 $0.9 \leq \text{pose} < 1.1 : \#\#\#$ 、 $1.1 \leq \text{pose} < 1.3 : \#\#\#\#$ 、以降0.3秒増えるごとに#を追加するものとする。

この句の認定法により、各句に番号(①～㉑)をつけ、基本的な談話文字化資料の完成となる。本稿では、この基本的な談話文字化資料に、必要に応じて分析対象箇所記号や下線や網がけを加えて、分析に適した形に変えてゆくこととする。

次節以降では、実際の文字化資料を紹介し、分析を行なうこととする。

4. くつろぎ場面の文字化資料

4・1 音韻的カタ仮名表記

①ソーハイッテデクラリネット^Aッテユーガツキ^Bニナッ^Cテ[—]##② α ソーナンカネ[—]チューガッコーサンネンカンワマダハジメタバッカデ[—]#③ゼンゼンワカンナカッタケドオンブヨムノモゼンゼンヨメナカッタシ[—]###④タイヘンダッタケド#⑤ β デモコー#⑥ γ ナ[—]ンカガツキオフクヨロコビ[—]⑦ミタイノオチューガッコーサンネンカンデ^Eアジワッテ[—]

4・2 漢字ひら仮名混じり表記

①そう、(中学校に)入って、でクラリネットっていう楽器になって—②そう、なんかね—中学校3年間はまだはじめたばかりで—③ぜんぜんわかんなかったけど—、音符読むのも全然読めなかったし—④大変だったけど⑤でもこう⑥なんか楽器を吹く喜びみたいのを中学校3年間で味わって—

5. TV場面の文字化資料

5・1. 音韻論的カタ仮名表記

①チューガッコーデワハジメテガツキオサワリ^{マシ i}テ#②アノクラリネット^aトユーガツキ^bノタントーニナッ^cタンデサガ#③サンネンカンヨイナカマニメグマレテ#####④ガツキオフクタノシサ^diオ^eジツカンシ#⑤アトガッソー##⑥スルコトノタノシサ^{d ii}モ#⑦ワカリ^{マシ ii}タ

5・2. 漢字ひら仮名混じり表記

①中学校では初めて楽器を触りまして、②あの、クラリネットという楽器の担当になったんですが、③3年間よい仲間恵まれて、④楽器を吹く楽しさを実感し、⑤あと合奏⑥

することの楽しさも⑦わかりました。

6. 談話構造の特徴

6・1. 「くつろぎ場面」と「TV場面」における談話構造の傾向

「くつろぎ場面」と「TV場面」における談話構造の特徴を、内容と、その内容に該当する句（①②等）及びその句の拍数（「拍」とは、日本語の最小発音単位で、仮名文字1文字分に相当する単位）を、まとめると下表のようである。

表 1、談話構造の特徴

内容 場面	1, 中学入学しクラリネットの担当になったエピソード	2, 苦労したエピソード	3, 周囲への感謝	4, 演奏の楽しみが分かったこと
くつろぎ 場面	① 25 拍	② 31 拍 + ③ 32 拍 + ④ 9 拍 = 72 拍	0 拍	⑤ 4 + ⑥ 38 = 42
TV 場面	① 22 拍 + ② 27 拍 = 49 拍	0 拍	③ 17 拍	④ 16 拍 + ⑤ 6 拍 + ⑥ 10 拍 + ⑦ 6 拍 = 38 拍

くつろぎ場面における内容毎の拍数の関係 2 > ** 4 > * 1 (> ** 3)

TV 場面における内容毎の拍数の関係 1 = 4 > ** 3 (> ** 2)

全内容（内容 1 + 2 + 3 + 4）における場面による拍数の関係 くつろぎ場面 = TV 場面

内容 1 における場面による拍数の関係 くつろぎ場面 < ** TV 場面

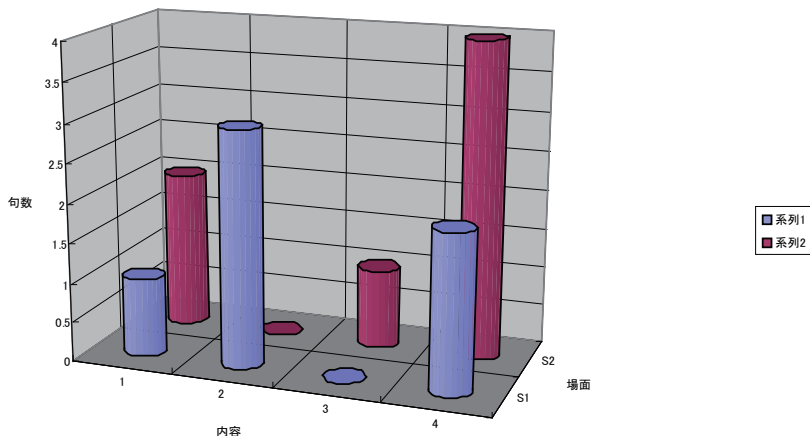
内容 2 における場面による拍数の関係 くつろぎ場面 > ** TV 場面

内容 3 における場面による拍数の関係 くつろぎ場面 < ** TV 場面

内容 4 における場面による拍数の関係 くつろぎ場面 = TV 場面

** : $p < .01$, * : $.01 \leq p < .05$, = : $p \geq .05$ χ^2 検定による。

図 1. くつろぎ場面とTV場面における内容毎の句数



* S 1・系列1は「くつろぎ場面」、S 2・系列2は「TV場面」における各内容の句数を示す。

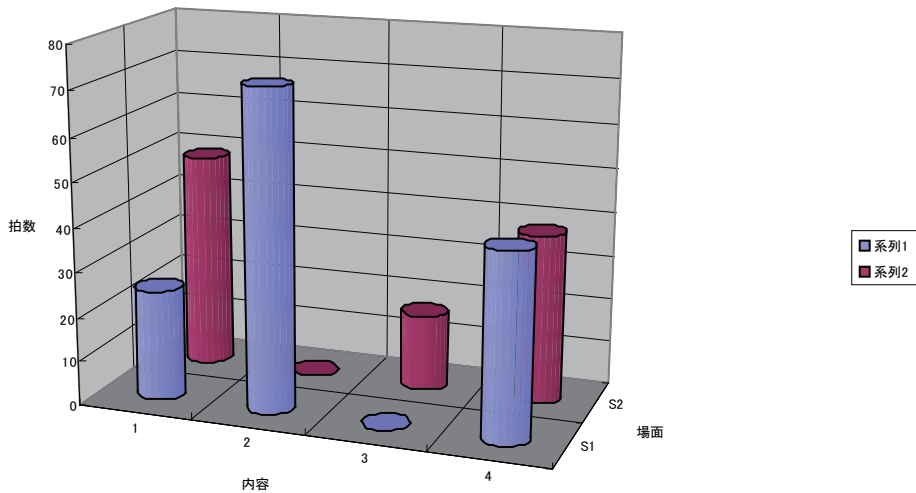


図2. くつろぎ場面とTV場面における内容毎の拍数

S1・系列1は「くつろぎ場面」、S2・系列2は「TV場面」における各内容の拍数を示す。

表1と図1、図2から、次のようなことが読み取れる。

- (1) 「くつろぎ場面」における談話は、「1. 中学に入学してクラリネットの担当になったエピソード」を短めに紹介し、「2. 苦勞したエピソード」を詳しく具体的に述べ、「4. 演奏の楽しさが分かったこと」をやや詳しく述べて締めくくりとしている。
- (2) 「くつろぎ場面」における談話には、「3. 周囲への感謝」がみられない。
- (3) 「TV場面」における談話は、「1. 中学に入学してクラリネットの担当になったエピソード」をやや詳しく述べ、「3. 周囲への感謝」を手短かに述べ、「4. 演奏の楽しさが分かったこと」をやや詳しく述べて締めくくりとしている。
- (4) 「TV場面」における談話には、「2. 苦勞したエピソード」がみられない。
- (5) 談話全体の長さについてみると、総拍数は「くつろぎ場面」と「TV場面」において、統計的に有意な差がみとめられないことから、両場面において同様であるといえる。
- (6) 「くつろぎ場面」と「TV場面」両方にみられる内容「1. 中学に入学してクラリネットの担当になったエピソード」の長さについてみると、拍数は「TV場面」における方が「くつろぎ場面」におけるより統計的に有意に多いことから、「TV場面」における方が長いといえる。
- (7) 「くつろぎ場面」と「TV場面」両方にみられる内容「4. 演奏の楽しさが分かつ

たこと」の長さについてみると、拍数は「TV場面」における方が「くつろぎ場面」におけるより統計的に有意に多いことから、「TV場面」における方が長いといえる。

- (8) 談話全体の長さについて、句数の視点からみると、本談話における句数からは、統計的に有意か否かを判断することは量的に少なすぎるため控えざるを得ないが、内容毎の句数の順位をみると、その傾向は、拍数の視点でみたときとほぼ一致している。「TV場面」における「4. 演奏の楽しさが分かったこと」の句数が拍数の場合に比べて多くなっているが、それは、(句の切れ目となる)ポーズを多めに入れながら、述べているためと考えられる。

6・2. 「くつろぎ場面」と「TV場面」における談話構造の性質

それでは、なぜ、前節で読み取れるような傾向(1)～(8)が生じるのであろうか。ここでは、その要因を考察するにあたり、各内容の談話中における位置づけ^[注1]について検討する。

「1. 中学に入学してクラリネットの担当になったエピソード」は、談話全体の中で「話題提示」の役割をしていると考えられ、くつろぎ場面でもTV場面でも共通にみられ、特に私的または公的要素が強いということはない内容になっている。

「2. 苦労したエピソード」は、内容4「結果」にいたる具体的エピソードだが、私的要素の強い内容となっている。

「3. 周囲への感謝」は、内容4「結果」にいたる要因として述べられているが、公的要素の要素の強い内容と考えられる。

「4. 演奏の楽しさが分かったこと」は、談話全体の中で「結果」を示し、しめくくりの役割をしていると考えられ、くつろぎ場面でもTV場面でも共通にみられ、特に私的または公的要素が強いということはない内容になっている。

6・3. 「くつろぎ場面」と「TV場面」における談話構造と切り替えのメカニズム

以上(6・1と6・2)で述べた事柄を、「句の内容の公私」の視点を加えてまとめると、表2のように示すことができる。

表2. 「くつろぎ場面」と「TV場面」における談話構造の切り替え

場面 \ 句の役割	話題提示	マイナス評価の具体的エピソード	社交辞令	結果
\ 内容の公私	共通	私	公	共通
くつろぎ場面	短	長	×	中
TV場面	中	×	短	中

* 本表の「短」「中」「長」は、すべて表1で示した検定結果を反映するものである。

「くつろぎ場面」は、聞き手が互いによく知っている「同年代同性の親しい友人」であるため、公的な社交辞令は現れない。一般的に両場面に共通に現れると考えられる冒頭の「話題提示」は短く、また「結果」も中程度の拍数で抑え、私的な具体的エピソードを全

体の約半分に至る拍数で語っている。

一方、「TV場面」は、聞き手が互いに全く知らない不特定多数の人々であるため、私的な「具体的エピソード」は現れない。一般的に量場面に共通に現れると考えられる冒頭の「話題提示」は中程度に、そして公的な社交事例を短くサラリと述べ、「結果」も中程度の拍数でしめくくっている。

6・4. 談話の類型化

以上より、二つの場面における談話構造を類型化すると、次のように示すことができる。

(1) くつろぎ場面の談話構造

「話題提示<公私共通>→マイナス評価の具体的エピソード<私的>→結果<公私共通>」

(2) TV場面の談話構造

「話題提示<公私共通>→社交辞令<公的>→結果<公私共通>」

7. まとめ

本稿では、一個人の比較的短い場面別談話を対象として、拍数による量的根拠により、談話要素を句の役割と内容の公私の視点から位置付け、談話構造の類型化を行った。

複数の人物を対象として、談話構造の一般的類型化を行う必要があるが、未知の部分が多い当該分野においては、一個人の場面別談話の分析と、多人数による集団を対象とした分析を平行して行い、両者を突合せながら（即ち、個人内の要素と類型、個人間の要素と類型を総合的に視野にいれながら）、研究を進めることが有効であると考え^[注2]。

補説

ここでは、談話構造以外の、くつろぎ場面とTV場面における言語形式の特徴—音的特徴と形態的特徴—の変容について解説する。

1. 音的特徴

付加長音「■」 : ϕ

付加長音は、音韻論的カタ仮名表記において■で示した部分である。

付加長音はくつろぎ場面の句末を中心とした部分に適用され、TV場面にはみられない。具体的に両場面における付加長音度数を示すと、次のようである。

くつろぎ場面 6

TV場面 0

これは、統計的（二項検定）に有意に「くつろぎ場面 > TV場面」（危険率5%水準）であるということができる。

即ち、本フェリス生は、くつろぎ場面においては句末を中心に長音を付加し、TV場面においては長音を付加しない傾向があるといえるのである。

2. 形態的特徴

2・1. (クラリネット) ㉑ッテ (ユー) : (クラリネット) aト (ユー)

㉑ッテはくつろぎ場面で、aトはTV場面で使用されている。この使用パターンは、一般的に、前者がインフォーマルな形式で、後者がフォーマルな形式であると捉えられていることと合致する。

2・2. (ガッキ) ㉒ニ : (ガッキ) bノタントーニ

㉒ニはくつろぎ場面、bノタントーニはTV場面で使用されている。

「タントー」(担当)の部分は、文脈から推定できるので、情報内容の伝達の面からすると、必ずしも言語形式で表現する必要はない。従って、気心が知れた親しい友人が聞き手の「くつろぎ場面」においては㉒ニ(格助詞「に」)だけが使用されている。しかし、話者について事前の情報がない不特定多数の聞き手に対する「TV場面」では、文脈による推定によらなくても、明確に内容を示すことが望まれ、「タントー」という語が使用されている。

2・3. (ナッ) ㉓テー : (ナッ) cタンデスガ

㉓テーはくつろぎ場面、cタンデスガはTV場面で使用されている。

待遇法の観点でみると、前者は常体、後者は丁寧体である。

常体がインフォーマルなくつろぎ場面で、丁寧体はフォーマルなTV場面で使用されるという一般的傾向に則した例といえる。

2・4. ヨロコビ ㉔ミタイノオ : タノシサ d iオ、タノシサ d iiモ

くつろぎ場面では「名詞+ミタイ+ノ(準体助詞)+オ(格助詞)」が、TV場面では「名詞+オ(格助詞)」(d i)、「名詞+モ(副助詞)」(d ii)が使用されている。

「ミタイ(ダ)」はそれ自体やや俗語的なニュアンスをもった語といえることができる。「ミタイ(ダ)」は、一般的に準体助詞「ノ」が接続する場合には連用形「ミタイナ」をとり、「ミタイナノ」となるが、ここでは活用語尾「ナ」を脱落させた「語幹+ノ」の形式である「ミタイノ」が使用されており、より俗語的ニュアンスが増しているといえる。

この俗語的形式は、「親しい相手に親しみを込めて述べる」表現効果があり、インフォーマルな「くつろぎ場面」に相応しい表現であるといえるが、フォーマル「TV場面」ではその俗語勢ゆえに相応しくない表現であるといえる。従って、TV場面では「名詞+オ(格助詞)」(d i)、「名詞+モ(副助詞)」(d ii)が使用されているのである。

2・5. ㉕アジワッテー : eジッカンシ

句末が「アジワッテ(ー)」などのようなテ形中止は、「くつろぎ場面」「TV場面」とも使用されているが、「ジッカンシ」のような連用形中止は、「TV場面」でしか使用されていない。これは、句末の連用形中止は、やや文章語的ニュアンスが含まれるため、フォーマルな場面専用の劣勢(少数派)形式といえることができる。

2・6. φ : サワリ ㉖ iテ、ワカリ ㉖ iiタ

サワリ ㉖ iテ、ワカリ ㉖ iiタのような丁寧の助動詞「マス」を伴う形式は、「TV場面」

のみにみられるフォーマル場面専用形式とすることができる。先に述べた③タンデスがも丁寧の助動詞「デス」を伴った形式として同様であるといえるが、ここでは、両場面の対応関係を中心にまとめているので、 ϕ （ゼロ）との対応として、形式的に区別して示すこととした。

3. 談話展開機能に関わる形式の特徴

ϕ : α ソーナンカネー、 β デモコー、 γ ナンカ

α ソーナンカネー、 β デモコー、 γ ナンカの形式は、談話展開機能に関する形式といえる。その機能とは、「聞き手にその直後に述べる内容をきかせてゆくために、聞き手の注意を引く」というものである。他のフェリス生の場面別談話においても、インフォーマルな「くつろぎ場面」で多く使用され、フォーマルな「TV場面」ではあまりみられないようである。

- 【注】 1. 特に「公私」の要素(加藤正信他 1989)を導入する。これは内間直仁(1990)のウチ・ソト意識とも共通するものである。
2. 勝田耕起(2005)は、大学生の文章を対象に、その文法・文体的特徴を明らかにしている。同一人物における場面別談話とともに、文章における文法・文体・論理展開との関係も興味深いところである。

参考文献

- 荒則子 2003「方言談話における計量国語学的類型論」『日本語学会 第127回 予稿集』日本語学会
- 石井直樹 2002『音声工房を用いた音声処理入門』コロナ社
- 内間直仁 1990「沖縄言語と共同体 ウチ社会の意識とことば」社会評論社
- 沖裕子 1993a「談話型から見た喜びの表現—結婚のあいさつの地域差より—」『日本語学』12-1
- 沖裕子 1993b「談話からみた穂貸しの方言／西の方言」『月刊言語』22-9
- 沖裕子 2001「談話の最小単位と文字化の方法」『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』35
- 沖裕子 2002「談話の方言学」(日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会)
- 勝田耕起 2005「大学生に対する国語教育—文法と文体—」(齋藤孝滋編 2005)
- 加藤彬子 2004「神奈川県話者B氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 加藤正信・村上雅孝・三井はるみ・田中牧郎・鎌田真俊 1989「言語における日本人の公私観念—文献における語彙調査と水沢市における場面別調査から—」『日本文化研究所研究報告別巻』26
- 金子仁実 2004「福島県話者D氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 川原サオリ 2005「2 準神奈川話者」(齋藤孝滋編 2005)

- 川澄香奈恵 2005「3 茨城話者」(齋藤孝滋編 2005)
- 琴鐘愛 2005「日本語方言における談話標識の出現傾向」『日本語の研究』1-2
- 久木田恵 1990「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162
- 久木田恵 1992a「北部東北方言の談話展開の方法」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院
- 久木田恵 1992b「共通語訳からの方言弁別は可能か」『日本語論究』1、和泉書院
- 齋藤孝滋 1992「各地録音紹介—文字化と解説 東北2 岩手方言」『国文学解釈と鑑賞』7
- 齋藤孝滋 2004a「音響音声学的アプローチ」(饒平名尚子編 2004)
- 齋藤孝滋 2004b「社会言語学的方法のアプローチ—ヴァリエーション分析—」(饒平名尚子編 2004)
- 齋藤孝滋 2005a「談話の資料化と構造特徴研究法」(齋藤孝滋編 2005)
- 齋藤孝滋 2005b「教材音声を用いた研究例—音響音声学的アプローチ—」(齋藤孝滋編 2005)
- 齋藤孝滋 2006「方言の現在と方言研究の今後」全国大学国語国文学会編『日本語日本文学の新たな視座』おうふう
- 齋藤孝滋 2007「音規則の計量的適用類型判定法の提唱—二項検定・カイ二乗検定法にもとづく類型判定一覧表を用いて—」『日本方言研究会 第84回研究発表 発表原稿集』日本方言研究会
- 齋藤孝滋 2008 刊行予定「場面別談話の言語的・パラ言語的資料化と構造特徴研究法」(齋藤孝滋編 2008 刊行予定)
- 齋藤孝滋編 2008 刊行予定『日本語・日本文化の発信・受容・変容に関する基礎的研究』
- 齋藤孝滋編 1999『地域言語調査研究法』おうふう
- 齋藤孝滋編 2004『現代女子大学生における談話と文法』DTP 出版
- 齋藤孝滋編 2005『大学生の日常言語生活に関する記述的・社会言語学的、言語教育学的研究』DTP 出版
- 齋藤孝滋・奈良夕里枝・晋萍・伊藤孝浩・フェリス女学院大学地域言語調査会 2000「共通語使用の談話展開類型と言語形成期獲得方言の影響」『日本方言研究会 第71回研究発表 発表原稿集』日本方言研究会
- 斉藤淳子 2008 刊行予定「1 神奈川話者」(齋藤孝滋編 2008)
- 佐藤和奈 2004「神奈川県話者 C 氏における談話の研究」(齋藤孝滋編 2004)
- 佐藤有香 2005「1 神奈川話者」(齋藤孝滋編 2005)
- 島津朱美 2004「静岡県話者 C 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 須崎由嘉 1999「東西方言折衝地域における談話展開の社会言語学的研究」『日本言語学会 第118回大会予稿集』日本言語学会
- 鈴木あずさ 2005「4 準栃木話者」(齋藤孝滋編 2005)
- 芹沢美樹 2004「静岡県話者 D 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 園部美由紀 1997「豊橋方言における談話展開の方法」『名古屋・方言研究会会報』14 (齋藤孝滋編 1999 に再録)

- 田中香織 2003 「スペイン・ガリシア地方出身者が話すカステイーリャ語談話展開分析の試み」
『フェリス女学院大学日文大学院紀要』10
- 田中香織 2004a 「同一人物における談話展開の方法のバリエーション—内容差についての一考察—」『言語と人間』6・7合併号
- 田中香織 2004b 「雑誌インタビューにおける談話展開方法の類型論的研究」『日本語文学』韓国
日本語文学会
- 田中香織 2004c 「物語の分析」(饒平名尚子編 2004)
- 田中香織 2005 「日本語非母語話者の自然談話による言語コミュニケーションの方法の一考察」
『フェリス女学院大学 日文大学院紀要』12
- 中下満裕 2004 「群馬県話者における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 中島暢子 2004 「埼玉県話者における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 西彩乃 2004 「福島県話者 B 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 西ヶ谷知里 2004 「静岡県話者 A 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 野崎希世江 1996 「江戸語における談話展開の特徴」『名古屋・方言研究会』13 (齋藤孝滋編
1999 に再録)
- 畑中宏美 1994 「富山県氷見方言の談話展開」『北海道方言研究会二十周年記念論文集 ことばの
世界』北海道方言研究会
- 古澤友美 2004 「福島県話者 C 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 丸山法子 2004 「福島県話者 A 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 三堀美沙 2004 「神奈川県話者 A 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 山田麻未 2004 「静岡県話者 B 氏における談話と談話展開方法」(齋藤孝滋編 2004)
- 饒平名尚子編 2004 『談話分析ワークブック』DTP 出版
- Kaplan, R. 1966 Cultural thought patterns in inter-cultural education. *Language Learning* 16.
- Labov, William and Joshua Waletzky 1967 Narrative analysis : Oral versions of personal
experience *Essays on the Visual and Arts*. 12-44 University of Washington Press
- Labov, William 1972 *Language in the Inner City*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press